

蟹と蝦との命を贖ひて放生し、現報に蟹に助けられし縁

渡部 和雄

人間の歴史というもので一番はずかしいと思うことは、人間の歴史の中で、人は必ず〈生きよう〉としていることである。

人は因縁を語る動物であるらしい。因縁に自分を依せてみる。その筋によって生きる。因縁には神とか仏とか、自分を超えるものを基盤にすることが必要である。

物語（言葉）は社会的なものだから、自己が隠れるようにしか在りえないだろうに、その言葉（社会）に表現されることによって自己が安定するように体感するのである。社会化した自己、物語（言葉）に一致して〈生きよう〉とするわけである。

これはまた隠れた神（仏）の社会化（現世化）でもあり、〈奇跡〉ともいう。復活は死んでまた〈生きる〉ことであった。

人が因縁を語るといふのは、その奇跡への参与、神（仏）の現世化の作用であった。救いといふのは案外異端化し

てしまうことであろう。故に言語（物語）は人間（ひとり）の不倶戴天の敵なのである。

ニーチェはこんなことを言っている。「人間における偉大さをあらわす私の方式は、運命への愛である。」（『この人を見よ』）と。〈運命への愛〉というのも、〈因縁〉を語ることなのだろう。

昔、一二、一二と仏教が伝来したといった。神や仏は飛行機や船には乗らない。本来的に神や仏は酔うことのないものである。さて渡来した仏の像というのは、天皇や為政者が〈礼拝して願えば、思うことがすべて成る〉ものであり、庶民が〈礼拝しては、戒律が与えられる〉ものであった。そうでなければ国家における宗教などというのは間尺に合わないものであり、社会化し、国家化しない限り、宗教は国民の救済にはなりえないだろう。

言語表現というのはいずれも支配と被支配の、強者と弱者の符号だろうに、その理解という表現は不可能になっている。言葉が言葉する、表現が表現することは不可能である。

「縁」（エニ）は弱者（負性）が語る矛盾である。その矛盾を説明する表現もまた人類は持たないから、縁の物語りの主人公はまたしても歴史の部品に復帰してしまうのである。

多分、生と死、明と暗、言葉と讟唾など、始原的には〈縁〉に基づきも、〈奇蹟〉に基づきもしなかったろう。それらは本来、同一の基盤の上に見えていたのではなかったか。復活などというのは昔、エジプトでは不可思議などという印象も持たなかったであろう。

昔、人間は両性具有で、男根を切り取った者が女性で、その女性が男性を恋した。という話をしたことがあった。（パウサニアス）

聖書は奇蹟を集めた本である。言語表現だから〈汝の信仰〉が歴史復帰につながる。

「ダビデの子イエスよ、我を憫みたまへ、と言ふ。イエス立ち止まりて、かれを呼べと言ひ給へば、人々盲人を呼びて言ふ、心安かれ、起て、なんぢを呼びたまふ。盲人うはぎを脱ぎすて、躍り上りて、イエスの許に來りしに、イエス答へて言ひ給ふ。わが汝に何を為さんことを望むか。わが師よ、見えんことなり。イエス彼に、ゆけ、汝の信仰なんぢを救へり。」(マルコ 十47-52)

ここでは〈ダビデの子〉の話になっている。国家的、社会的言語表現だから死は〈生〉に、盲は〈明〉に健常化している。

「そこから移り行き、イエスはガリラヤの海の近くに來られた。すると、大群衆が、足のなえた人、不具の人、盲人、口のきけない人、その他多くの人を連れて彼に近づき、それらの人を彼の足もとに投げ出さんばかりにして置いた。それでイエスは彼らを治された。」というイエスも〈願うことがすべて成就する〉という神になってしまう。イエスはかつて、盲目、聾啞はすべて〈神のしるし〉だと言わなかつたらうか。イエスは神のしるしを国民、社会人、健常者に回復してしまつた。

ここには個人(ひとり)の「エニ」の語りは存在しない。いわば不具の人は対象的に、客観的に存在させられている。

表現すること、説明すること、語って語りつくすことは神を消滅し、国家秩序を構成することであつた。キリスト教国家、仏教国家、イスラム教国家などというのは、多分、神(仏)からの矛盾であろうが、そうした矛盾を語る言語表現はありえない。

〈生きる〉は国家化、社会化だから当然、個人の〈死ぬ〉ことにひとしいだろう。

言葉を話す人の前から消えた神も、神は船にも飛行機にも乗らないから、多分村の道や山や谷を歩いたのだろう。その跡を訪ねると結構、神の気配ははっきり見えるもので、そんな時、人はエニを語るのを忘れてしまうのかも知れない。

エニを語りながら生きて行くということは国家内生存に再び出会うことである。そこはあの歴史的生存そのものの世界である。

エニは国家、社会水準の筋(論理)ではない。国道、市道、村道といった筋道を通らない。国民は必ず公道を行くに対して、エニを語る人は人目につかない裏道、廻り道を通る。その道では動物や植物に会う。人がまだ動物から余り離れた存在ではない状態での生きる道である。

狭き門から入れば神(仏)に会う。だが国家内存在は、その動物、神(仏)に出会った場所で充足してとどまってはられない。

下層階級は動物に会い、神仏に会って、国民、市民、村民の門に入らなければならない。この矛盾が〈心〉といわれるようなもので、その心の上に物語(言語表現)する。その話をエニというのだろう。

二

そう、人間にネロやヘロデに抵抗(逆対)することができるとしたら、田舎で生産共同体的生活をしていることだけであろう。

〈カエサルのはカエサルへ〉という、人は死ぬことを覚悟しなければなるまい。

「山背国紀伊郡の部に、一の女人有りき。姓名詳かならず。」

というのは田舎のことだろう。それだけが国家内言語から疎遠であることができる。「姓名未詳」「女人」はいい、せめてもの言語可能性である。「エニ」を背負える存在だろう。

〈汝殺すなかれ〉〈蟹を殺して食うことなかれ〉という言葉が受納されるのは多分農耕生産共同体性だけであろう。そこには人間の生活だけがあって〈殺すなかれ〉という倫理ではなかった。しかし「エニ」を語る言語表現にはまた宗教という枠が使用される。生産共同体性と国家（国民）との関係である。〈ひとり〉が宗教の枠に当てはめられようとしている。その枠に自己を置くことで充足しようとしているのであろう。

「天年慈の心蹟にして、因果を信ぜり。」

「五戒十善を受持して、生物を殺さず。」

と前提される。女人は仏教の枠の中にある。「天年慈の心」なしにはエニという語りは成立しえないだろうが、枠以前の「慈の心」というのは難しい。多分、生産共同体性内の存在とでも言うしかないのではないか。続く「因果を信ぜり」と「五戒十善を受持して、生物を殺さず」はその慈の心に外側から与えられた律法である。慈の心はそれで安定する。

〈五戒〉受持の中に（殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒）、殺生は第一に挙げられている。受持してとあるから既に仏教の枠内に存在している。これまた言語表現を制約する。生産共同体性では蟹は採集生活の基礎的存在であった。逆に蟹を放してやっても〈慈の心〉などによるものではなかったらう。

言語表現や倫理は与えられた枠の中で充足する。ということから推測するに、この環境には〈ひとり〉という人間は存在しないことになるだろう。言語表現には人間（ひとり）は存在しない。いわば人間には「表現の自由」などというものは本来あるわけのないことである。

「聖武天皇のみ代に、彼の里の牧牛の村童、山川に蟹を八つ取りて、焼き食はむとす。是の女見て、牧牛に勧めて曰はく、「幸に願はくは此の蟹を我に免せ」といふ。

これは〈五戒十善〉的な表現と思われる。農耕生産共同体的生活に於ては山川の蟹は貧弱な食糧であつたらう。クジラが浜に打ち上げられたような時、国民、社会人、まして文明人はそれを海に戻してやろうとする。死んだら砂に埋めて哀悼しようとする。しかし昔の村長はその肉を切り分けて持ち帰るように村人に布告するだろう。

その昔、神の子は〈これは私の体である〉と言ひ、人は神の体を食べている。神が姿を隠して、人は神のしるし（体）を失つた。『ローマ帝国衰亡史』では〈蛮族（人）〉という。「八つ」も形式的である。牧童が小さな蟹八匹くらいしか取れなかつたら村のお姉さんは協力してもっと取つてやればよかつたのではないか。

ここで女人（五戒十善主体）が言動しうるのは「聖武天皇のみ代」によって可能なのだろう。国民の言動と天皇の言動は似ている。人は支配者に似ない言動を行う可能性を持たない。「幸に願はくは此の蟹を我に免せ」という表現が生活離れしている。当然、生活そのものの童男はきき入れない。

「懇に逃へ乞ひ、衣を脱ぎて買う。童男等乃ち免しつ。義禪師を勧請し、哭願せしめて放生せり。」

という。〈衣〉は蟹より高価であつた。それが認識というものであつた。禪師を勧請するにも費用がかかつたらう。衣

を織った人は蟹を食べなかったわけでもあるまい。そんなかんぐりは言語表現、認識などの外だった。

「然ありし後に、山に入りて見れば、大きな蛇、大きな蝦を飲む。大きな蛇に誂へて言はく、是の蝦を我に免せ。多の幣帛を賂し奉らむといふ。蛇聴さずして吝めり。」

この「山に入りて見れば」というのは（オジイサンは山に）という童話とそう隔たりはないだろう。先の「山川に蟹を」と併せてみると両方とも女人は山に（働きに）行く形になっている。山は農耕地以外の野、林などを言うこともあるが、山川というからには実際の山を言っているのである。その山行きの具体性は書いてないが、あるいは行基達の土木工事の支援に山菜採集などをする女性会員のような組織があったのかも知れない。

「方今、小僧行基、併びに弟子ら、街衢に零置りて妄りに罪福を説き……詐りて聖道と称し百姓を妖惑す。」（養老元年詔）

とあるを見れば行基集団は（悪の巢窟）というに似ている。多分ここから発言というのは（説話）などをひっくり返す表現になってもよかつたろうに、そんな言語表現はありえない。「百姓を妖惑す」というが、この女人もその百姓であったとしたら、女人は妖惑する者と妖惑される者の間に住んでいたことになる。これはスリルだろう。その女人が「多くの幣帛を賂し奉らむ」という。女は裕福で、蛇を非常に恐れていたことがわかる（ように書かれてしまっている）。

蛇は何より農耕生産性によって対象化される。『風土記』に、

「郡より西谷の葦原を截ひ、ひらきて新に田を治しき。此の時、夜刀の神、相群れ引率て、悉尽に到来り、左右に防障へて、耕佃らしむることなし。」

とは大変な有様で、まさに蛇の谷であった。

「夜刀の神、池の辺の椎株に昇り集まり、時を経れども去らず。是に、磨、声を挙げて大言ひけらく、「此の池を修めしむるは、要は民を活かすにあり、何の神、誰の祇ぞ、風化に従はざる」といひて……。」

というのは国家の政治であった。境界を設定して蛇を山に追い上げて神として祀る。此方側は皇民の生活の場所である。政治的には、国家組織的には、此方側を侵略した蛇は合法的に殺してもいい。

農耕生産性を基盤にしている旧約聖書では蛇は神と神の下孫への敵の様相を持たされる。

エバ（サタン）は蛇の恋人であったから、マリアはアダム・エバ以前に用意されていたという話もある（『象徴としての女性像』若桑みどり）。

無原罪の聖母はエバの系譜にはならないという順序である。マリアもイエスも農耕生産性を全く示さないから、それと共にキリスト教は国家的、社会的秩序ともなるからマリアにもイエスにも蛇は敵（サタン）となる。

「蛇よ、まむしの子孫よ、どうしてあなた方はゲヘナの裁きを逃れられるでしょうか。」とまではヘロデにもピラトにも大祭司にも言っていない。相手はパリサイ人である。マタイ二三章全部が怒りに溢れている。

「偽善者なる書士とパリサイ人よ、あなた方は災いです。あなた方は人の前で天の王国を閉ざすからです。」

天の王国、神への道を閉ざすものが蛇（パリサイ人）であった。

さてこのような政治的、思想的な蛇とは違って、この蛇は民話的、あるいは童話的に存在している。舞台の上に大きな蛇と蛙が向き合っている。隣りにそれを見つめている〈慈の心〉の女性がいる。

「是の蝦を我に免せ。多の幣帛を賂し奉らむ。」

「女、幣帛を募りて、禱して曰く、汝を神として祀らむ。幸に乞は我に免せ」といふ。

「蛇聴さずして吝めり。」

「此の蝦に替へて、吾を妻と為む。故、乞我に免せ」といふ。

〈蛇が蛙を食わない〉という不條理。

〈人が蛇と結婚する〉という不條理。

この存在的不條理表現は、長いものに吞まれる弱者の心情によって構成されるのだろう。五戒十善には存在論的負性がある。加えて、蛇を神とし、男性とし、力として自らを弱者、女性として位置づけている。

そして蛇が蛙を飲む、いわは自然現象と 多の幣帛を賂し奉らむ、という人工現象は事の次第は同じことなのだろう。人間（慈の心の女）が動物の生存に優っているわけではない。

「蛇乃ち聴し、高く頭頸を捧げて、女の面を瞻、蝦を吐きて放つ。」

を『古典文学全集 靈異記』では、

「蛇が頭を上げるのは、女の顔をよりよく熟視するため。女の顔を熟視するのは、女の美貌を見つめたもので、蛇

の好淫を示す。」と、うまいことを言っている。

女的美貌と蛇の好淫は殆ど同等で、この次元で女性性は蟹や蛙の性質ではありえない。五戒十善などというのは農耕生産共同体などからは大分隔った、〈階級的人間〉のものである。絵本にすれば舞台に立っていた女人は高貴な美人ということになる。マリアだって美しい絵になった。

「今日より七日経て来。」

というのは婚縁の日。〈七日〉というのは西洋の古い物語によく出てくる。

ドラマチックという表現があるが、同じ舞台に登る者たちは全部似ている。異なる者たちのドラマというのは表現(演出)されない。

「さあ、急いで雄々しく死のうではないか。……暴力と隷従、凌辱のために子供たちと一緒に引っぱられて行く女たち」

とは、あのユダヤ陥落の〈マサダ〉の最後の様子である。戦いに敗けた方が受ける略奪と凌辱はまた『ローマ帝国衰亡史』の一面であった。凌辱は男と女の、勝者と敗者の相互性であった。性的欲求をうける聖女、悪代官と村娘。また男女は性によって愛を成立させたり、幸福になったりもする動物である。

女は敗北、歎願、許しの代償が〈性〉であることを知っていた。当然相手は、力、男性であることも知っていた。女が蛇に結びつけられている古い例では、クレタ島のクノッソス宮殿から出土した〈蛇女神〉の像がボストン美術館にあるという。前一六〇〇年頃のものであるという。これは地母神として信仰されていたものと推測される。地面を

はう蛇とその土地の生産性が結びつけられ、女の労働と生殖性が加わって、〈蛇女神〉という豊饒神が成立したのだから。

イシスはまた地母神である。当然、蛇とも関わっている。

「イシスは自然における女性的なものそのものとして、あらゆる種類の生殖の営み受け手です。」(プルタルコス)
エブが蛇の恋人であったとは先に触れたがキリスト教(新約)では蛇をサタンとしている。これはローマ帝国にキリスト教が入り込める一つの条件になっているだろう。ローマがエジプトを征圧するとイシスは異教の如く世の隅に隠れるようになる。ローマのフォルトゥーナは知識人に嫌われ、悪しき靈になりさがる。

国家・社会は農耕生産共同体性を支配する。蛇に結びついていた女は国家(法治的男性社会)に従属して、生産労働を失った。生殖だけ残った女が〈性〉に相応しく生きるようになった。性によって許され、性によって愛され、性によって律令社会を生きる。

「時に行基大徳、紀伊郡の深長寺に有しき。往きて事の状を白す。大徳聞きて曰く、「烏呼量り難き語なり。唯能く三宝を信ずらくのみ」といふ。」

生産共同体を離れて、国家の、したがって裕福な階級を占めた女は仏(神)を使用する。

〈蛇が蛙を呑まない〉という不條理を行基は蛇の殺戮によっても、追放によっても、神として祀って略して解決しようともしない。律令国家同一性の判断を与えようとはしない。

天武十年二月飛鳥浄御原令の編集始まる。

儒教的貴族社会、天皇制的律令国家の官人組織からの脱出。存在の不条理は存在の不條理のまま尊重する。不条理を言う女の口許を行基は見ている。律令国家のある階級をなしている男の家族である美しい女性の顔を見る。この女はカニ、エビ、カエル、サカナ、ウシ、ブタ、ニワトリを愛しているのだろうか。

〈量り難き表現〉〈量り難き内容〉

殆ど行基は無能力である。生産労働を去って律令国家の階級にいる女は神（仏）を使用できる。

創造主としての神（仏）、宇宙の摂理としての神（仏）がそのしるしとして現実を在らしめているなら不条理は不条理を解決し、条理は条理を解決するだろう。いえ、行基は〈解決〉とは言わないだろう。彼は神（仏）を使用することはない。

「唯能く三宝を信ずらくのみ」といふ。

行基集団が道を作り、橋を掛け、堤を造る時は毎日カエルや蛇を叩き殺し、踏みつぶしていたし、その死骸は無数に横たわっていたろう。マムシなどは家に持ち帰り、貴重な食料となり、ガマガエルもうまかったろう。

「教を奉りて家に帰り、期りし日の夜に当り、屋を閉ぢ、身を堅め、種々発願して以て三宝に信へまつる。」

〈三宝に信へまつる〉は行基の言うことに等しい。行基にしても女にしても、これは賭けのようなもので、これは案外、信仰というものの面白さなのだろう。

「蛇、屋に繞り、婉り転り、腹ばひ行き、尾を以て壁を打ち、屋の頂に登りて、草を咋ひ抜き開き、女の前に落

「繞」を「マトフ マツハル」(字類抄)と訓む。「婉転」を「メグリメグリ」(名義抄)と訓む。「昨草抜開」は「茅草をくわえて引き抜く」と頭注にいう。

三

蛇の「屋に繞り」などという現象は一般的には存在しない。蛇は隙間があれば家の前後左右何処からでも屋内に侵入できる。春のへもぐら打ち、行事に、「長虫はくるなよ」といって屋敷の境界を廻るから、その四方八方性を含めていうのであろう。習俗を使用した表現である。蛇が屋内に侵入するのは鼠の巢、飼兎の巢、庭鳥の巢が目的である。

「尾を以て壁を打ち」も一般的には存在しない。蛇は土台辺の隙間、壁の穴など何処からでも入れるが、この話の場合は土間にも入れ込めないし、勿論土間から床上に登れもしないし、壁もしっかり作られている家屋が前提とされている。貧農の状態ではない。それで外壁を這って「屋の頂に登」ることになっている。けれどもその途中で蛇が尾で壁を叩くことは多分ない。蛇は頭部(上半身)を壁から離せるにしても尾で(下半分で)身を支えていて、尾で壁を叩くわけにはいかない。

これは他家を訪問する時の、聾入り婚などの(へおとない)の形をいうのだろう。そうとすれば「屋に繞り」(屋をめぐる)などは男どもの求婚の様相を示しているのかも知れない。一種の求婚物語になっているのだろう。

「屋の頂に登りて」というのも多分ないだろう。蛇は外壁をはい登って、軒下から屋根の内側に入るのである。草

屋根では、垂木に横木（細木）を結んで格子様にする。その上に軒から葺草をふき上げる。細木の太さだけ垂木と葺草の間は空いている。蛇よりは広い。その空間を垂木を伝って、蛇はネズミの巣を求めて、へ屋根の裏の一番上、棟木の辺りまで登っていく。

「草を咩ひ抜き開き、女の前に落つ。」も事実と違ふと思われる。ネズミは身軽に素早く逃げる。蛇は前半分を立てて飛びかかろうとする。尾だけでは体を支え切れず床に落ちる。

〈茅草をくわえて引き抜く〉と見られた草片はネズミの巣の草片である。葺草ほど長いものではない。この屋（家屋）には天井板はない。

「然りと雖、蛇、女の身に就ず。唯し爆く音のみ有りて、跳りかみくらふが如し。明くる日見れば、大蟹八つ集り、彼の蛇条然にむしり段切らる。」

「かみくらふ」はかみついてくう。

「条然に揃り段切らる」は筋状に？

「揃（むし）り段（つた）切らる」はむしり切段（断）する？

などは色々な切られ方、殺され方を一ぺんに言うのだろうか。「山川の蟹」が突然「大蟹八つ」になるのも相手が大きな蛇だからか。

多分、カニハサミ切るの遊び、民話、童話、お伽噺といった基礎がここにもみられよう。蛇が侵入が困難な部屋に蟹が何事もなく入っているのも、蛇を殺すことに主点のある表現になっている。

「悟なき虫すら猶し恩を受くれば恩を返すなりけり。」

「此れより己後は、山背国に、山川の大蟹を貴び、善を為して放生すなり。」

と終るのは報恩型―起原物語でもある。

「ヨーロッパの農家では、今でも鼠の害が少くないが、蛇は農作物その他の財産を鼠の被害から守ってくれる有用な生物であった。それは日本でも同じである。」(大和岩雄『十字架と蛇と渦巻』)

蟹が助けられ、蛙が助けられ、女が助けられた。蛇だけが殺された。

女の役割が終った。蛇の死は人の心の安定であった。何の疑念もなしに、その故に人は健やかになった。そして、この安定感から〈豈人にして恩を忘るべけむや〉が人の心情に収まるだろうし、放生会行事が成立する。

四

子―丑―寅―卯―辰―巳―午―未―申―酉―戌―亥と廻るのは時間なのか空間なのか。ネズミはウシに追われる。ウシはトラに追われる。トラはウサギに追われる。ウサギはタツに追われる。タツはヘミに追われる。ヘミはウマに追われる。ウマはヒツジに追われる。ヒツジはサルに追われる。サルはトリに追われる。トリはイヌに追われる。イヌはイノシシに追われる……くり返されるこの世の〈縁〉。イノシシはネツミを追う。

ミ(蛇)に追われたのは辰年生まれの子であつたらう。蛇は午年生まれの子に追われる。昔、聖書の話で蛇の頭を

踏み砕くのはイエスで、彼は午年生まれであつたらう。馬の蹄鉄が蛇の頭をくだく。蛇は馬のかかとかみつく。二十六才でイエスを生んだマリヤは辰年生まれの勘定になる。人間が歴史上に存在する限り、人間はサタンに追われる。〈人間〉は案外うまく出来ているらしい。

周知のとおり、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」との、蛇に対する神の言葉。

周知のとおり、「彼」はイエス・キリストであり、そのことによって、「彼」を産むであろう母が背景に茫漠と浮かび立って見えるのである。

というのは高橋たか子氏であるが、女と蛇は敵対関係におかれている。男には牧畜、狩猟などがあって、地上面での農耕は女性によつた時代があつた。

創世紀・アダムとエブの時以来蛇はまだ死なないで、サタンと死なないでいてイエスに抵抗している。

右はへマリヤへの祈りである故に、「彼」(イエス)を産むであろう母が、「背景に茫漠として浮かび立って見える」と高橋氏というわけである。〈蛇の頭を打ち砕く〉イエスの生誕が期待されていたというわけである。

プルタルコスは「イシスとオシリスの伝説について」このように書いている。

「大勢の人々がテュポンの所からホロスのもとへ馳せ参じましたが、テュポンの第二夫人のトウエリスもホロスの側につきました。一匹の蛇が彼女を追ってきましたが、ホロス軍の兵士たちがそれを切り刻みました。」

蛇が追うのだからトウエリスは辰年生まれであろう。ホロス軍の兵士は午年の者たちである。

オシリスがホロスに問う所がある。「戦いに出て征く者に最も有用な動物は何だと思うか。」「それは馬にございませぬ。……馬は敗走する敵兵を孤立せしめ、敵軍をせんめついたします。」

トウエリスというのは女神タウレットのギリシャ語読み、結婚して河馬の姿をしていると註されている。とすれば、軍隊・馬・トウエリスは一体化して、この面白い伝説が作られているというわけである。

このトウエリスは農耕生産の女神であろう。そこに王・国家・軍隊が混成した話である。物語、伝説というのは何世代をも含んで、複合した構成になっている。この女神がイシスでもあれば、これもマリア・神の子ホロスの形になって面白い気もするが、プルタルコスはそのようには言っていない。

人間（男・女）と蛇との関係（縁）について、何処で気づいたのかユングは、

「竜や蛇は、タブー破り、すなわち近親相姦という退行の結果にたいする不安を示す象徴例である。」

という。〈蛇ににらまれたカエル〉という、強大な力の前に意識を失うような具象である。呑み込まれる不安。

竜（蛇）はギリシャ語のドラコーン。神話、メルヘンも生きてきた。単に人間への障害的対象というよりは心的体験のようにあったのであろう。蛇は人間の虎馬であった。で、近親相姦で、国家と国民のような関係なのか。

五

それにしても蛇は何故殺されるのか。

「神蛇に言ひたまひけるは汝是を為したるに困りて、汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて詛はる。汝腹行て一生の間塵を食ふべし。」(創世 三―14)

蛇が詛われている環境は「諸の家畜」と「諸の獸」(それ以下)のようであった。この表現は諸の家畜や諸の獸やも詛われている様相で一般的、歴史的価値観を示している。

それら全体は農耕環境を示している。

「カインエホバに言ひけるは我が罪は大にして負うこと能はず。視よ汝今日斯地の面より我を逐出したまふ。我の面を見ることなきにいたらん。我地に吟行ふ流離子とならん。凡そ我に遇ふ者我を殺さん。」

カインと蛇の会合場所、そこは〈流離〉の地、農耕環境であった。そこがサタンの棲家。サタンのいる所に神が現われる。サタンの言動が神を引き寄せるのである。

モーセの前から神が姿を隠してから、気の遠くなる才月が経って、ダビデの王国などまで出来てしまっていた。ダビデ以来、神が姿を現わすことはなかった。

その間、神はマリアを用意していたという話が〈マリアへの祈り〉である。マリアは農耕生産共同体性の中に生きていた。ローマ帝国と属領ユダヤの流離地にマリアは生まれた。マリアはサタンに追われた。流離の農耕生産共同体を追うものはローマ帝国とユダヤの国であった。そこから見えた神は〈カエサルのはカエサルに返せ〉という。神を見つけたマリアは神の子を産む。神の子は馬に乗って来て蛇の頭を踏み砕く。

生産共同体性の敵が何故蛇の形をとったのか。砂漠に生息する毒蛇のイメージがあったのかも知れない。しかしカ

イン（農耕生活者）と蛇は同郷の生物であった。

素朴に生活的に考えれば蛇は邪魔で、危険である故に殺されたという本来性はあるだろう。共に農耕生産共同体性・マリアを追いつめたのはローマ帝国とその属国ユダヤの社会であった。神の子が踏み砕こうとしたのは国家・社会という怪物（サタン）であった。国家・社会とは神（存在）からの罪であった。で、国家と国民はイエスを十字架に掛けて復讐した。〈神が死んだ〉わけではなく、社会は神を殺しながら国家を作るのである。

かくして、王、教皇、修道院長、司教、参事会員もまた神からの罪であった。

今も、ボルゲーゼ美術館でマリアはその子イエスと共に蛇の首根を踏みつけている。サンクトペテルブルクにはドラゴンを踏みつけている騎馬像がある。

本来的に物語（説話）が作られてくるのは農耕生産性、身体性の根源的記憶が立ちのぼることによるだろう。あの有名な、

「取って食べなさい。これはわたしの体を表わしています。」

「あなた方はみなそれから飲みなさい。これはわたしの契約の血を表わしており、」

というパンとブドウ酒は農耕生活性であり、親密な身体性である。パンが肉、ブドウ酒が血とは原始的な人間の感覚である。

蛇はドラゴン、悪魔になり、ブドウ酒は〈聖霊〉となった。カナの婚礼で水ガメがブドウ酒で充たされた、あの奇蹟、ブドウ酒の横溢は pneuma（聖霊）の横溢とされた。

ブドウ酒はブドウの腐敗醗酵によるもので何かの特殊性ではない。旧約以来エルサレムの地はヨエル書に、

「山々には甘いぶどう酒が滴り、丘には乳が流れ、ユダの川床にはどこも水が流れる。」

と描かれる。イエスの言葉はそうした伝統の素朴さであろう。それで「ヘカナの婚礼」の祝福を作り上げたのは一体誰なのか。イエスは家庭を肯定しないから「ヘカナの奇蹟」信仰説を作り上げたのはヨハネ集団であろう。彼らもまた宗教的祭礼（信仰行事）を形成したのであろう。